

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第3号

1996年10月

政治思想学会のこれからの方向のために

代表理事 田中治男

政治思想学会（JCSPT）の3年目の出発に際し、去る5月26日の理事会で互選され、同日の総会で承認頂きました第2期の代表理事として、ご挨拶旁々、今後の方向について若干の展望を示しておきたいと思えます。

定例の研究会については、この2年間と、学会としての正式発足に先立つ5年の経験を通じて、プログラム内容、開催校とも、手順よく準備される体制が確立しており、それぞれを責任担当する理事のローテーションも、年2回の理事会の決定に従い、効率よく機能しております。そして、研究会の内容をできるだけ国際的交流の中で進めるという規約上の趣旨も、関係会員諸氏の努力で、一貫して生かされているといえます。

ただ、本学会はこれまで会員たちの任意団体として存続していますが、3年を経過しようとするところで、日本学術会議の公認団体としての資格をとるべきかどうかという問題が提起されています。これについては、前述の総会の席で、私自身一言触れておいたつもりですが、まず幾つかの基本的な条件があります。それは、相当数の正式会員、一定割合（85～90%）以上の会費納入率、公正な理事選出規定を含む規約、そして年2回以上の会誌発行実績等であります。われわれの学会は、最初の3条件を充たすことに不安はないと思われませんが、最後の条件については、これが雑誌ないし紀要のようなものの発行を意味するとすれば、かなり困難であろうと言わざるをえません。今後、この会報は年2回発行することに決められていますが、その内容にどこまで実質的な研究発表を盛り込めるか等については、なお検討を要すると思われれます。この点は、これからの理事会の検討課題となりますが、会員諸氏からも積極的な提言が寄せられることを期待します。今期の代表理

事としては、次期、次々期の理事会の段階で実現にいたるような形で基礎的な作業を進めるという方針を立てておくつもりであります。

次に、政治思想研究の現状について見ますと、私の知るかぎりでも、イギリス革命期、フランス啓蒙期を中心に充実した研究成果が書物の形で公刊されているのは、本当に喜ばしいことと言えます。しかしながら、これは思想史研究の分野に止まることではありませんが、対応する書評活動が十分に行われていないという実状があります。たしかに、最近では幾つかの大学、研究機関等で研究会が開かれ、新しい著作・論文を俎上に取り上げる慣行が広まっているようですが、やはり、じっくりとした書評論文がより広汎な人々の前に提示される機会がもっとあればと思われます。もちろん、欧米の専門誌におけるような質量ともに豊かな状態は容易に望むべくもありませんが、この方向での前進を期待したいものです。その意味で、われわれの会報に、さしあたりは会員の著書・論文の紹介・短評のための欄をおくことを一案として提起しておきます。

さらに、これは私の個人的経験に発するものですが、この夏中国で、いずれも英米に留学し、一人は Rawls, *Political Liberalism*を、もう一人は『経済と社会』を英訳から翻訳中という中堅研究者（北京大学助教授）と会う機会をもち、多角的な観点の所在を知ることができました。＜アジア諸国における英米思想の受容と批判＞はこれからも重要なテーマになると言えるでしょうが、日本政治学会が「非西欧地域との交流」を一つの軸にしようとしているのと同じベースは取れないにしても、われわれの学会もこの方向を将来的な目標の一つにしたいものと考えます。

本号には、去る8月15日に逝去された丸山眞男先生を追悼する文章を渡辺浩会員にお願いして掲載しました。われわれの敬愛する丸山先生は、本学会の発足時から会員として進んで登録し、精神的な支持を与えて下さいました。ここに、それに対する感謝の気持ちとともに、深い哀悼の意を表したいと思えます。

政治思想学会理事・監事氏名

(1996年5月26日政治思想学会第三回総会において承認)

理事

有賀弘、飯島昇藏、飯田泰三、小笠原弘親、小野紀明、加藤節、佐々木武、佐々木毅、
佐藤正志、鷲見誠一、関口正司、田中治男（代表理事）、千葉眞、塚田富春、中谷猛、
半澤孝麿、平石直昭、松本礼二、宮村治雄、渡辺浩、和田守

監事

星野修、吉岡知哉

追悼 丸山眞男先生

渡辺 浩

本学会会員丸山眞男先生は、本年8月、逝去された。82年4カ月余の御生涯だった。

先生は、1914年に生まれ、1937年に東京帝国大学法学部を卒業後、直ちに助手に採用され（指導教官は、南原繁教授）、1940年、同助教授に昇任、新設の「政治学政治学史第三講座」（通称、東洋政治思想史講座。1965年、「アジア政治思想史講座」と改称）を担当された。1950年、教授に昇任。1971年には、健康上の理由により退官されたものの、本来の停年の時を迎えられる1974年3月まで、大学院非常勤講師として、病を押して後進の指導に尽力された。その後も、強い精神力をもって研究・執筆に従事され、日本の（そして地球の）一市民として意見を表明され、同時に、接触を求める国内外の研究者・市民の様々な要望に、寛容に、根気強く応じ続けられた。しかし、本年晩春以来、御病気が悪化し、東京が異常に暑かったあの52回目の「8月15日」、遂に永逝されたのである。

例えば、今日、日本の政治思想に学問的関心を持つ者一プロであれ、アマチュアであれ一に限ってもよい。およそそのような者で、『日本政治思想史研究』『日本の思想』『「文明論之概略」を読む』『忠誠と反逆』等の名著に接しないものはいないであろう。無論、それはそこに述べられたすべてが金科玉条として拳々服膺されているということではない。学問の世界にそのようなことはありえない。しかし、例えば、56年前に書かれた先生の助手論文を、現在の徳川時代の思想史研究者も無視することができない。1942年以来書かれた先生の福沢諭吉研究を、現在の福沢研究者も、避けて通ることはできない。それらは、研究史において、また「学問の思想史」において、研究者が自分を位置付けるための確乎たる座標軸をなしているのである。先生の関わったすべての知的分野において、多少とも同様のことが言えるであろう。しかも、その広大な分野での諸業績は、見事に相互連関している。その意味で、先生は、ご自身の指摘された「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互連関を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で一否定を通じてでも一自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当たる思想的伝統はわが国には形成されなかった」（『日本の思想』5頁）という状況を、一部、みずからの努力によって克服されたのである。そして、だとすれば、本学会会員を含む多くの人々は、語の深い意味において、多分、多少とも「丸山学派」なのである。

一方、先生に「弟子」はいない。少なくとも、先生の言葉遣いでは、そうだった。談話の文脈上、「弟子」と言っておかしくないところでも、必ず、「研究室でぼくが助教授として指導教官になっていた助手とか院生とか」（『丸山眞男集』第12巻、264頁）といった回りくどい表現を敢えてされた。それはおそらく、研究者養成は、師資相承としてではなく、制度に則って教授団全体によって行われるという新制大学の建前を、実行においてのみならず表現においても、尊重されたからである。同様の、律儀に、そして頑固なまでに、

自分も承認した建前を遵守する態度は、随所に見られた。おそらく、その背後には、一切の公共的な建前を軽侮して「本音で行こう、本音で」と言い放つような態度が、一見痛快にして「野党的」でありながら、その実、建前の現実化を当初から放棄することによって、結局、現に権勢を有するもの一人であれ、現象であれ—をそのまま容認し、承認し、遂には翼賛することに至ることへの、凛とした拒否があった。かつて直接に先生の指導を受けるという特権に与った者達（「弟子」ではなく！）は、それを理解した。そして、その個人的な温かさと原則を守る厳しさとの双方を、共に愛したのである。

先生はそのような両面があった。その文体が表し、その音楽への深い愛情が示しているように、先生には、豊醇な美意識があった。しかし、耽美主義は断乎として拒絶された。その論証の緻密さの示すように、先生には、事物の細部への鋭敏な感受性があった。しかし、現実の無限のニュアンスに埋没し、結果として曖昧さに居直ることは、嫌悪された。先生は、「不合理」が「合理」を支え、「合理」の極みが「不合理」に至り、大きな善意が途方もない残酷さをもたらすといった歴史の皮肉に、よく言及された。しかし、それを理由に、思想的・政治的な態度決定を回避し、不決断に陥ることを、峻拒された。そして、「近代」がその当初からかかえている問題性も、先生は強く意識された。しかし、それをさも事新しげに言い立てて憎悪の気分を醸し、理性自体をみずから呪詛し、さらには人類全体を嘲笑するような態度には、決して与されなかった。

当然ながら、先生への関心は国内外で高い。現在、その既発表の作品をほぼ網羅した『丸山眞男集』（16巻、別巻1）が、刊行中である。従来から次々に著されている日本語による研究書・論文に続き、最近、英語による研究書も刊行された（Rikki Kersten, *Democracy in Post-War Japan : Maruyama Masao and the Search for Autonomy*, London; Routledge, 1996）。先生の作品は、中・韓を含む多くの言語に翻訳され、欧米に、アジアに、先生を敬愛する人々が多い（先生を時には感情的に論難する人々の中に、そのような人がいったい一人でもいるだろうか）。

先生を失ったことは、無論、設立間もないわが学会にとって大きな痛手である。しかし、実は、およそ自主的な知の営みを愛し、人類の「知の共和国」の繁栄を願う者すべてにとって、これは、深い痛手なのである。

1996年9月26日

今年度の政治思想学会研究会「市民社会論再考」に参加されたスニル・キルナニ、メルヴィン・リクター両教授から、この学会の印象を含めて、日本における政治思想の研究状況についての印象記を寄せていただきましたので、原文のまま掲載します。（なお、リクター氏は最初の来日予定直前に急病に罹り、学会それ自身にはペーパーを寄せられただけでしたが、回復後、来日され、各地で研究報告、講演を行い、7月に帰国されました。）

Civil Society: Theory and Practice

Sunil Khilnani

As I sat down to write these personal impressions of the Conference on Civil Society held in May this year, news reached me of the passing away of Professor Masao Maruyama. Civil society was of course one of his great themes and I can think of no other Asian intellectual whose work, over more than fifty years, manifested so consistent a commitment to the idea of civil society. He saw the presence of civil society as the foundation for intellectual and political liberty, upon which in turn a democratic society rested. While in Japan last May, I felt very strongly the sense in which he was the presiding spirit of our conference. In his ability to combine magisterial scholarship with pointed political intervention, Professor Maruyama offered a model of intellectual activity. He showed how an intellectual can and must have a role to play in the wider and often turbulent life of the society in which he lives; but he also exemplified a modesty about what the extent of that role could be. I of course never knew Professor Maruyama, except through his works; but the opportunity I have had, through the conference and through my friendships over the past few years, to be in contact with students of Professor Maruyama or those who have been influenced by his work and example, I feel has given me a glimpse of his spirit, and a sense of how it continues to animate intellectual life in Japan.

Although Professor Maruyama is best known outside in Japan for his work on Japanese intellectual history, his contribution to the methodology of intellectual history was equally significant. I found the wide and fascinating range of papers at the Conference, which examined the notion of civil society across a several intellectual and political traditions (including the Marxist and French traditions, Fukuzawa, and Post-war Japan), as well as across different civilizations and historical-political contexts (China, Islam, and Russia) to be exhilarating. The variety of papers, and the discussion they provoked, also convinced me of the importance of the subject matter. But there were also, I felt, some fundamental analytic questions that were raised. For example, is civil society a determinate tool of conceptual analysis, through which precise comparative research can be undertaken? Like democracy, civil society is a term that has traveled far from its original contexts of use; even within Western political theory, the term has no consistent or constant meaning across the various traditions that have given it importance—for example, the Lockean, Montesquieuan,

or Hegelian traditions. It is not a tidy concept, and, in a sense, that is precisely the source of its political power: its plasticity, which has encouraged people in very different contexts to take it up and try to do various things with it.

It seems to me that civil society is not a concept whose history is confined to texts, and for political theorists engaged in analyzing this term in the wide variety of non-western contexts, it seems less appropriate to take a purely textual approach, to look for analogues or 'translations' of the concept in the texts of a particular intellectual tradition. The history of concepts is not only a textual history: it is also the history of practices. It would seem to me that in trying to find forms of and resources for civil society in non-western locations, political theorists might usefully broaden their approach. They could focus on practices, and try to elicit from certain practices the structures of meaning through which people in different times and places conceptualize their world and its possibilities. For example, in thinking about the possibilities of a 'public sphere' in non-western contexts, one could try to widen the Habermasian perspective, and look at ways in which physical space is used and conceptualized in different societies: what sorts of spaces are recognized as 'common' or public, for what sorts of activity, and so on.

The meaning of civil society is today a point of active dispute: international development agencies claim to propagate civil society, while in different locations populist social movements, religious fundamentalists, and democrats all seek to appropriate the term. Civil society is a term that is constituted out of many voices; it has too many meanings, too much life invested in it. Political theorists and intellectual historians cannot hope offer some precise, stipulative meanings for the concept. But we can provide clear accounts of how the term has been used for a variety of purposes by human beings in very different contexts; and we can also offer arguments for how one might use the term today. In doing the latter, it seems to me that we must seek to persuade as citizens, not as experts.

My strong sense of the Conference was of a very lively, stimulating and fraternal occasion, one which I felt enormously privileged to attend. I hope that there will be opportunities in the future to resume the many conversations that were initiated in the course of the meeting. I would like once again to express my thanks to the officers and members of the Japanese Conference for the Study of Political Thought, and especially to Professor Matsumoto, for inviting me to share in such an enjoyable and instructive event.

Impressions and Thoughts on the Present State of the History of Western Political Thought in Japan

Melvin Richter

Although a few weeks a scarcely qualifies me as an authority on the state of my subject in the many Japanese universities, I am happy to pass on my impressions about the history of western political and social thought as practiced in Japan. On the whole, I was very much impressed both by the existing state of knowledge and by the research projects about which I was told. Insofar as the history of western thought is concerned, my Japanese colleagues seem to be very well informed about the literature and the key issues, as well as about the scholars abroad associated with these studies. For example, after several of my talks, there were very specific, pointed questions about my views of Edward Said's *Orientalism* and *Culture and Imperialism*. As for the graduate students I met, whether writing their dissertations in Japan, or at universities abroad, they seem to have chosen important topics, and to have developed the language and other skills requisite to research. I was also struck by the interest of both senior professors and their junior colleagues and students in learning about the latest work abroad on their fields of specialization.

Both my wife and I were also impressed by the dedication to professional goals despite teaching loads, which relative to American standards, are heavy. Particularly impressive was the setting within which I gave papers, the study groups which meet on Saturdays. In the United States, few university teachers would be willing to devote much of a weekend day to serious discussion. Increasingly, American academic meetings are dominated by programs in which there are too many papers, and not enough time for any of them to be discussed seriously. My wife and I were most gratified by the opportunity to have sustained consideration of the papers we had written.

One condition which we regretted was the fact that relatively few of our Japanese colleagues seem to write in western languages. This means that their real achievements go unnoticed elsewhere in the world. Although long-term planning and commitment would be necessary to further language skills, this would seem to be necessary if Japanese research discoveries are to receive the recognition they deserve outside their country. Those senior scholars who publish in other languages have already set a notable example, which has clearly inspired a number of their

students to study abroad and write their dissertations in the language of the universities they have attended.

ケンブリッジ大学における研究生活

堤林 剣

1991年の秋、私が新人Ph.D. studentの一人としてケンブリッジ大学社会政治学部の説明会に出席したときのことである。どの程度頻繁に指導教官と接することになるのか、とのある学生の質問に対して、説明会の幹事を務めていたH教授は次のようにこたえた。「今まで指導してきた学生の中でとてつもなく優秀な博士論文を書いたものは二人いた。その中の一人とは殆ど毎月スーパーヴィジョンを行った。もう一人とは三年間で二回しか行わなかった。最初と最後だけだ。」なるほど、コース・ワークが一切なく、また指導教官との接触も個人の判断に委ねられる制度は、いわば独立心と自主心を何よりも尊重するイギリスならではのものだ。もちろん、このような制度に対して不平を漏らす者も少なくなかった。高い学費を払っているのに面倒見が悪すぎると彼らは言うのだ。だが、私の場合はこのような自由放任主義を大いに歓迎し、毎日図書館で自分の研究に没頭する傍ら、面白そうな講義やセミナーがある時だけ講義室に足を運ぶといった生活を満喫した。学則では、大学に登録している者はどの講義やセミナーにも自由に出席できるとなっているため、私は、政治思想、哲学、歴史はもちろんのこと、音楽や文学の講義にもよく顔を出した。また、政治思想史の領域に限って言えば、二週間に一度のJ. ダンとスキナーとが主宰する思想史研究会が特に面白く印象的であった。ちなみに私は指導教官とは四ヶ月に一度程度会った。

このようにして私はケンブリッジ大学特有(?)の制度をむしろ歓迎したわけであるが、しかしPh.D. student達が自らの研究成果を発表したり議論したりする研究会すら存在しなかったのにはさすがに戸惑った。仕方がないので、ボランティア・アソシエーションを創設するがごとく、似たような志をもった同僚達とともに結集し、そういった会合を始めた。そして意外なことに、一旦このようにして研究会ができると、学部側は喜んでコピー代やワイン代(!)を出してくれた。

大学図書館のティー・ルームもしばしば議論の場と化した。気分転換のためにコーヒーを飲みに行くと、そこには必ず知り合いが何人かいて、合流するや否や議論の渦に巻き込まれた。ひどい時には数時間に渡って話し込むことすらあった。このようなインフォーマルな場で得た知識は意外とためになることが多かったような気がする。また、幸か不幸か、私はあまり酒に強くないためパブにはたまにしか行かなかったが、そこでも盛んに議論が日々行われていたようである。実際、DNAの構造を解明した学者も、「イーグル」というケンブリッジの有名なパブで、生温かいピターを飲みながら議論している最中に閃いた

そうだ。

しかし、ケンブリッジ大学ならではのものとして私が特に有意義だと思ったのはカレッジ制度である。各カレッジには宿泊施設があるほか、ダイニング・ホールや、新聞を読んだりテレビを見たりすることができるMCR（大学院生専用のコモン・ルーム）があり、そこでは研究領域のまったく異なった人々が集まり意見を交換したりする。このような学際的な場で展開する議論は非常に刺激的であると同時に愉快であったし、しばしばカレッジの食事の不味さを忘れさせてくれた。またこのような環境はタコソボ型人間になりやすい条件を備えているような気がした。

研究会情報

政治思想の領域における研究者間の情報交換の一助として、本学会の会員を主要メンバーとして、定期的に活動している研究会の活動状況を、当該研究会の責任者の同意を得て、この会報に掲載することにしました。とりあえずは、在京の三大学を基盤にするものになりましたが、今後、情報が寄せられれば、さらに範囲を拡大することも考えております。なお、以下の記事も、予定を含めて、情報を公開することをとりあえずの趣旨としており、研究会そのものが公開であることを必ずしも意味しません。ご留意下さい。

成蹊大学思想史研究会

連絡先：成蹊大学法学部亀嶋研究室内

〒180 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1 TEL 0422-37-3623

- 1996年1月27日 テーマ：南原繁『国家と宗教』をめぐって
報 告：鈴木規夫
- 3月9日 テーマ：田中治男「自由論の歴史的構図」（佐々木毅編『自由と自由主義』東京大学出版会、所収）をめぐって
報 告：加藤節、杉田孝夫
- 4月20日 テーマ：政治史と思想史の間—高濱俊幸著『言語慣習と政治—ボリングブルックの時代』（木鐸社）をめぐって
報 告：佐々木武
- 6月22日 テーマ：アメリカ政治学の形成—メリアムを中心として—
報 告：森真砂子
- 7月20日 テーマ：悲劇のパラドックスの解明と超克を求めて—自由論的視座から考察するバンジャマン・コンスタンのルソー批判—
報 告：堤林剣
- 10月26日 テーマ：知識学と自我原理（仮題）
報 告：瀬戸一夫
- 11月16日 テーマ：初期スチュアート期のコモン・ローと選挙権（仮題）
報 告：土井美德
- 12月14日 テーマ：千葉真著『アーレントと現代』（岩波書店）をめぐって
報 告：西本郁子、村井洋

政治思想学会会報
JCSPT Newsletter No.3

東京大学政治理論研究会

連絡先：東京大学法学部研究室佐々木毅

〒113 東京都文京区本郷7-3-1 TEL 03-3812-2111 (内) 3242

- 1996年1月20日 テーマ：権力論の再構成
報告：川崎修
- 2月17日 テーマ：新しい選挙制度で、選挙活動がどのように変わりますか？
報告：Raymond Christensen
- 3月9日 テーマ：対米貿易交渉の政治学—構造と変容
報告：谷口将紀
- 5月18日 テーマ：書評・佐々木毅編『自由と自由主義』
報告：松本礼二、渡辺浩
- 6月15日 テーマ：Europe and 'the Other' in Eighteenth Century European Thought
報告：Melvin Richter
- 6月29日 テーマ：The Inadequacies of Public Life in Japan and the United States
報告：Michael Mosher
- 7月13日 テーマ：朱子学と朝鮮建国—鄭道伝を中心に
報告：朴鴻圭

早稲田大学政治思想研究会

連絡先：早稲田大学政治経済学部飯島昇蔵研究室内

〒169-50 東京都新宿区西早稲田1-6-1 TEL 03-5286-1281

- 1996年3月23日 テーマ：合評会・大澤麦著『自然権としてのプロパティ—』（成文堂）
報告：大川正彦、太田義器
- 4月20日 テーマ：合評会・千葉真著『ラディカル・デモクラシーの地平—自由・差異・共通善—』（新評論）、宮島泉著『自律デモクラシーの理論—民主的自律の共和国考—』（新評論）
報告：荒木昭次郎、山田正行
- 5月11日 テーマ：合評会・川本隆史著『現代倫理学の冒険』（創文社）、桂木隆夫著『市場経済の哲学』（創文社）
報告：田中智彦、渡辺幹雄
- 5月24日 テーマ：合評会・藤原保信・飯島昇蔵編『西洋政治思想史II』（新評論）
報告：岡本仁宏、杉田敦
- 5月27日 テーマ：Reflections on the Methodology of Intellectual History
報告：Sunil Khilnani
- 6月29日 テーマ：合評会・添谷育志著『現代保守思想の振幅』（新評論）、佐藤正志著『政治思想のパラダイム』（新評論）
報告：金田耕一、的射場敏一
- 7月1日 テーマ：Tocqueville's View of Bonapartism
報告：Melvin Richter
- 7月13日 テーマ：合評会・高浜俊幸著『言語慣習と政治—ボーリングブルックの時代』（木鐸社）
報告：松園伸
- 10月26日 テーマ：合評会・川出良枝著『貴族の徳、商業の精神—モンテスキューと専制批判の系譜』（東京大学出版会）
報告：厚見恵一郎、太田義器

*The Review of Politics*誌より、千葉眞理事に次のような照会がありましたので、お知らせいたします。なお、お問い合わせは直接*The Review of Politics*誌にお願いいたします。

"Non-Western" Political Thought
Special Issue
CALL FOR PAPERS

The Review of Politics plans to publish in the summer of 1997 a special issue on contemporary "non-Western" political thought. The issue will focus on contributions deriving from, or inspired by, the philosophical traditions of the Middle East, South Asia, and East Asia. We welcome manuscripts exploring the relevance of these traditions to contemporary theoretical and practical-political issues or comparing these traditions among themselves or with other world traditions. We encourage letters (preferably with a brief abstract) indicating an intention to submit a manuscript. Manuscripts should be received by January 15, 1997.

Fred R. Dallmayr
Peter R. Moody, Jr.
Guest Editors

BOX B, NOTRE DAME, INDIANA 46556-5629 PHONE (219)631-6623
FAX(219)631-8609 E-MAIL:ROP.Editor.@nd.edu

1996年理事会記録

第一回・第二回（1996年5月25日/26日 於：日本大学）

- ・代表理事に田中治男理事（成蹊大学）を選出。事務局は向こう2年間、早稲田大学政治経済学部へ置くことを決定（その他の理事については2頁参照）。
- ・会員名簿を1997年度中に更新発行することを了承。
- ・会報は今後年2回発行することを了承。
- ・新入会員の承認（12頁以降を参照）。
- ・1997年度研究会の企画の大枠について、加藤節理事より報告、了承。

第三回（1996年10月4日 於：北海道大学）

・以下3点の報告につき、了承。

- 1 会報第3号の発行予定（10月25日発行）について松本礼二理事より報告。
- 2 会員名簿の更新計画について佐藤正志理事より報告。
- 3 1997年度からの予算編成を前提に会計業務の合理化方針につき飯島昇蔵理事より報告。会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終わることとする。

・1997年度研究会企画の進展につき、加藤理事より報告。

・1998年度以後の年次大会の開催場所について、98年度・一橋大学、99年度・京都大学とする案が田中代表理事より提案された。

政治思想学会95年度会計報告*

収入	金額（円）	支出	金額（円）
前年度繰越金	529,849	通信費	70,090
会費**	651,500	印刷費	39,300
利子	4,389	消耗品費	40,555
		謝金	177,000
		諸費***	500
		95年度繰越金****	858,293
計	1,158,738	計	1,158,738

*この報告は、95年4月1日より96年3月31日までの収支にかんするものであり、飯島、星野両監事の監査を受けた後95年5月25日の理事会において承認され同日の総会において報告された。

**会費とは今年度期間中に納入された会費の合計金額である。

***諸費とは超過して納入された会費の返却金である。

****繰越金の内訳は、普通預金が851,553円、払込口座が6,000円、現金が740円である。

会員の異動

政治思想学会会報
JCSPT Newsletter No.3

1997年度政治思想学会研究会
企画予告

期 日：1997年5月24日—25日

場 所：国際基督教大学

第一部

「政治的なるものをめぐって」

第一セッション「政治的なるもの—いくつかの断面—」

報告：齊藤純一・杉田敦・杉田孝夫

司会：前田康博

第二セッション「政治的なるものとその担い手」

報告：梅森直之・岡本仁宏

司会：小笠原弘親

第三セッション「歴史における政治的なるもの」

報告：亀嶋庸一・新見直彦・山田央子

司会：鷲見誠一

第二部

「戦後日本の政治思想研究」

報告：福田欽一・石田雄

討論：小野紀明・米原謙

司会：加藤節

1996年10月25日 発行 発行人 田中治男 編集人 松本礼二

政治思想学会事務局 郵便振替番号 00190-7-571218

169-50 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学大学院政治学研究科気付 電話03-3208-8534 FAX 03-3208-8567